

*** 幻覚か！ 国立天文台にピラミッド型屋根が5つあった
(菱形基線尺試験室の基礎、基線尺台などを発見)**

アーカイブ室新聞 137号に国立天文台構内にあった菱形基線の基線尺試験室棟の写真を発見した記事を書いた。偶然にも2009年2月にこの菱形基線の測定に来ていた国土地理院の方からその基線尺試験室棟の写真をいただいたのだ。3月5日、昼休みに天文台構内を探索していて、5個目のピラミッド屋根を発見した。菱形基線は菱形で南北点、東西点の4点で構成されて、基準点は4つでその上がピラミッド型屋根で蔽われていると思っていた。今まで48年間の天文台生活でこのピラミッド型屋根が5箇所にあった記憶はない。ところがなんと5個目を発見したのである。興奮し写真も撮った。しかし、同じ画面に5つ写っているわけではない。夕方になって「変だ！幻覚、あるいは錯覚ではなかったか？」という思いに駆られた。17時がとっくに過ぎていたが、今一度確かめに行った。やはりピラミッド型屋根は5個ある。

アーカイブ室新聞 137号に書いた基線尺試験室の建物の基礎も残っていた。菱形基線の北端点を東端点から25m延長した点に附属の基準点があり、その25mが基線尺の試験室という「うなぎの寝床状の建物」で覆われていた。菱形基線は1辺100mの菱形であるから基準点を覆うピラミッド型屋根は100m離れているはずだ。しかし、今日見つけた5個目のピラミッド型屋根は北端点を東端点から25m延長した点にあり、北端点と北端点から5個目のピラミッド型屋根を囲む建物の基礎が残っており、その上、その試験室で基線尺の校正測定に使われた石柱の台まで残っていた。やはり幻覚ではなかった。写真1が北端点から東端点からの延長線上にあるピラミッド型屋根である。



写真1 菱形基線の北端点の25m先にあった5個目のピラミッド型屋根

北端点を東端点から 25m 延長上にある点を附属点と言い、この 25m を使って基線尺の検定を行っていたのである。そしてこの 2 点を結ぶ線上を覆う間口 3m、長さ 40m の巨大な長い試験室棟があった（写真 2）。そしてその建物の基礎が残っていた（写真 3）。



写真 2 菱形基線 基線尺試験室の建物



写真 3 北端点の東端点側に残る基礎と写真 2 にもある石

写真 3 には、写真 2 の建物の手前の 2 個の石も写っている。この基線尺試験室の建物の存在を知っているものは、現役の天文台職員にはいない。元台長の古在先生にこの件についてお伺いしたら、建物は知っているが写真は持っていない、いつの間にか壊されたとい

う印象しか持っていないということであった。秦さんが住んでいた官舎 31 号がそのそばにあったとのことである。写真 4 の右端の屋根が白く見える官舎が 31 号である。

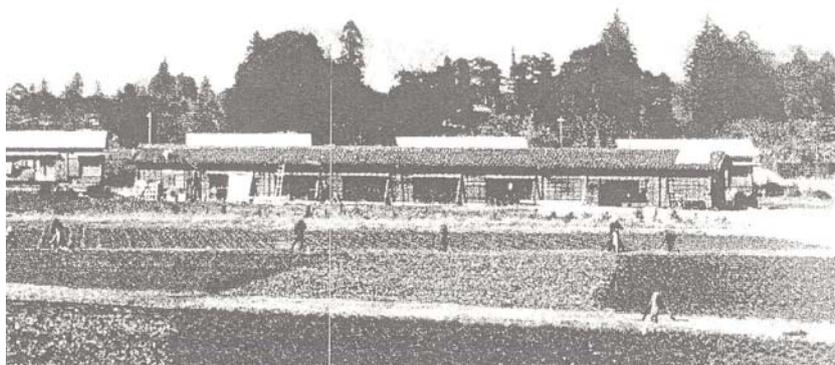


写真 4 菱形基線 基線尺試験室の建物を南から見たもの

この間口 3m、長さ 40m の巨大な建物さえ、国立天文台の歴史のなかにきちんと残っていない。所管が測地学委員会であった事もあるが、この菱形基線、基線尺試験室棟は、寺田寅彦氏が提唱した大陸移動説の検証のための施設で、毎年定期的に測定されており、関東大震災の前後でこの菱形基線に囲まれた土地の面積に変化が出たというので有名で、地震の研究者には、「三鷹」の名前はこのことで知られているということである。



写真 5 菱形基線 基線尺試験室の建物の内部

写真 5 は、基線尺の検定に使用されていた当時の建物の中の写真である。また写真 6 は検定中の写真である。この建物のなかには基線尺を延ばし、それを支えた石柱があり、その基線尺の目盛を顕微鏡で測定していた。その石柱も残っていた（写真 7）。



写真 6 菱形基線 基線尺試験室の建物の内部での測定の様子



写真 7 現在も当時の面影を残す石柱群

天文情報センターの若い女性のなかにはピラミッド型屋根が 5 個あることを知っていた人もいた。50 年近くいた筆者が知らなかった事を不思議に思われたが、この女性 1 人を除いて、まだこのピラミッド型屋根が 5 個あったことを認識している人を知らない。

写真 8 はこの石柱の 1 本が折れて草むらのなかに転がっている様子である。



写真 8 1 本の石柱は無残に折れて転がっている

この遺跡は、天文学に直接関係ない、しかし寺田寅彦という偉大な科学者が大陸移動説を唱え、その検証のためにつくり、関東大震災で結果を出したものである。